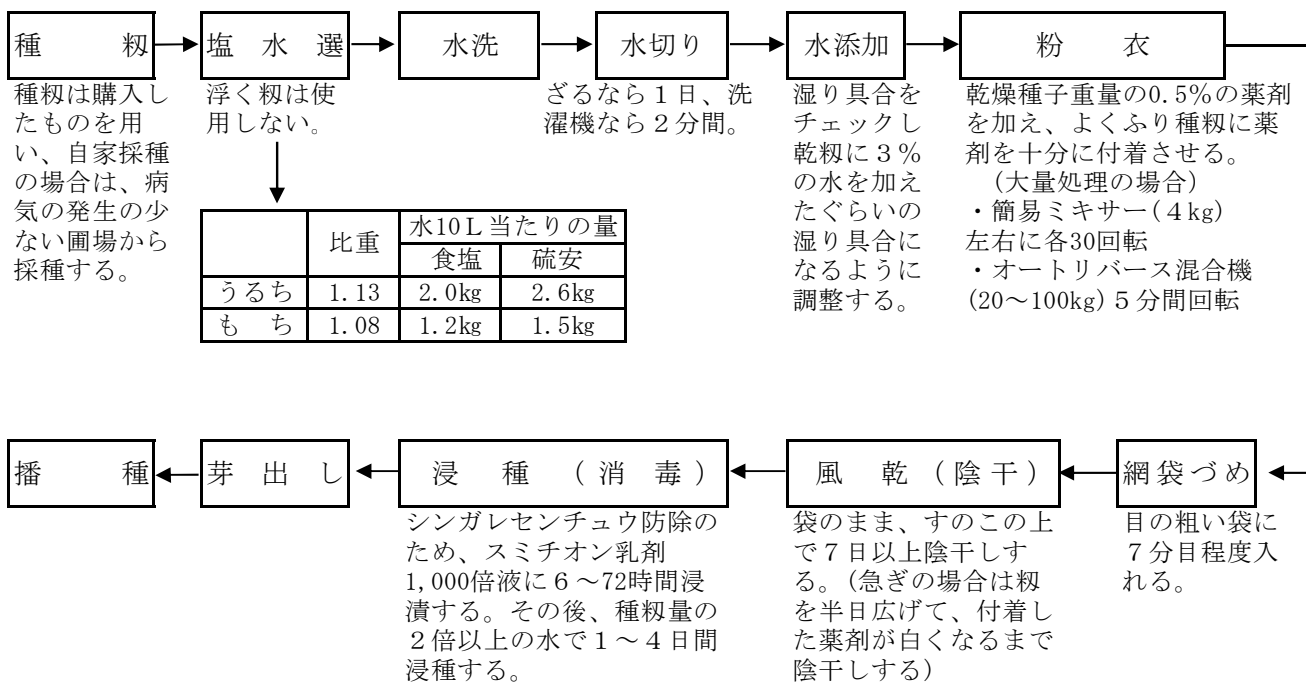


【普通作物参考1】

種子湿粉衣の方法



【普通作物参考2】

香川県水稲主要品種のいもち病抵抗性について

品 種 名	真性抵抗性 遺伝子型	香川県の主要品種を侵す レース検出率(%) (1997年)	耐病性 (圃場抵抗性)
コシヒカリ	+	100	やや弱
はえぬき	<i>pi-a, pi-i</i>	69.2	やや弱~中
オオセト	<i>pi-ta²</i>	0	-
あきげしき	<i>pi-a, pi-i</i>	69.2	やや弱~中
ヒノヒカリ	<i>pi-a, pi-i</i>	69.2	やや弱~中
おいでまい	<i>pi-a, pi-i</i>	69.2	やや弱
モチミノリ	<i>pi-k</i>	7.7	やや強
クレナイモチ	+(または <i>pi-a</i>)	100(<i>pi-a</i> とする場合: 69.2)	やや弱

※ +: 主働抵抗性遺伝子を持たない(いずれのレースにも侵される)ことを意味する。
クレナイモチは*pi-a*を持つとする試験例もある。
「水陸稲・麦類・大豆奨励品種特性表 平成28年度版」(農林水産省刊、2019.8発行)を参考。
但し、耐病性は栽培条件によって異なる場合がある。

【普通作物参考3】

サクラミミズの防除対策について

- 被害の様子:
 - ・ミミズが糞垣を盛り上げることにより、コンバインなどの刃に糞が詰まり、刈り取り作業に支障をきたしたり、イネが倒れやすくなる。
 - ・砂質がかった土壌で水持ちが悪い水田に多い。堆肥などの多施用や、有機物が多く含まれる。
 - ・生活排水が流入する水田で多発生する傾向がある。
- 耕種防除:
 - ・冬場に耕起する。
 - ・被害株が少数の場合は糞垣を取り除く。
 - ・有機物の投入量が多い水田は多発生する傾向があるので、投入量を減らす。

【普通作物参考4】

貯穀害虫の防除対策について

- 低温貯蔵法:
 - 断熱装置を備えた庫内の温度条件を15℃、相対湿度75%以下に保つ。

【普通作物参考5】

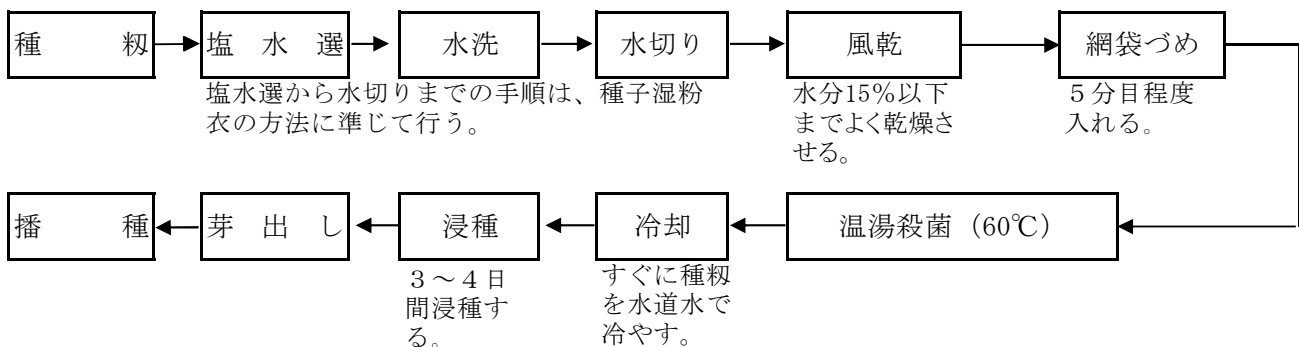
パック剤（ジャンボ剤）やフロアブル剤処理時の注意事項について

1. 小包装（パック）に使用しているフィルムは水溶性なので、濡れた手で作業したり、降雨等で濡れないように注意する。
2. パック剤の場合、湛水深が浅い部分があると投げ入れた薬剤が土壌表面に座礁し、有効成分の分散に影響することがあるので注意する。
3. 藻類の発生が多い水田では早めの散布を心がけ、多発している場合は散布しない。
4. 処理時は5 cm程度の湛水状態とし、圃場面積が30a（幅30m×100m）以下の場合は圃場の周囲（畦畔など）を歩行するだけの散布または投げ込みでよいが、短辺側畦畔の長さが30mを越える圃場では、畦畔からの処理に加え中央の条に入って左右両側に処理する。
5. 薬剤によっては吸湿性があるので、保管中の湿気に注意する。
6. パック剤・ジャンボ剤の同時散布・近接散布について
 - (1) 水面を這うようにして拡散する剤と、水中を拡散する剤に大別できるが、その拡散方法によって、さらに発砲型、展開型、油膜形成型などに分けられる。
 - (2) 同じ拡散方法の剤の同時散布の場合は競合が起こり、一方の剤の効果しか期待できなくなる可能性が高い（一方が全く拡散せず、その場で滞る）。また、拡散方法が異なった薬剤の場合でも、同様なことが予想され、また、拡散後、沈殿・土壌吸着の必要な薬剤の場合、それをもう一方の剤で邪魔されることがある。
 - (3) 近接散布の場合、一方が表面または水中を覆ったあとなので、あとからの薬剤の拡散が不十分になる。
 - (4) 以上のことから、同時散布・近接散布は避け、散布間隔は1週間程度あけることが望ましい。

【普通作物参考6】

温湯種子消毒の方法

1. 対象病害虫
いもち病、心枯線虫病（シンガレセンチュウ）、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、ばか苗病、褐条病などの病気（60℃・10分処理）
2. 処理の実際・手順
 - (1) 自家採種の場合は無発病圃場から採種し、塩水選（比重 うち1.13、もち1.08）を行って充実した種子を使う
 - (2) 塩水選後は十分に水洗いし、広げて完全に乾燥させる。乾燥が不十分だと発芽不良を引き起こす。
 - (3) 種子を網袋に4 kg詰める。網袋は余裕のあるものを使用する。詰めすぎると、内部まで温湯が浸透せずに消毒効果低下の原因となる。
 - (4) 水温が60℃になったら、種子の入った網袋を浸漬カゴに入れ温湯に浸漬する。なお、1回の処理種子量は、下に示した温湯処理機の場合、200リットル容量で8 kg、500リットル容量で16kgである。浸漬カゴは、2～3回上下に揺さぶり、網袋の中に温湯が行き渡るようにして沈め、温湯吹出口の真上にくるように置く。所定の処理時間に達したら、種子の発芽率低下を防ぐため、直ちに流水中で冷却する。
 - (5) 処理後、すぐに浸種を行わない場合は種子を袋から出し、日陰で十分に乾燥させてから保存する。温度変化の少ない場所においておけば、発芽率が低下せずに1か月間保存できる。



3. 使用する資材・器具の取り扱い方、注意点
 - (1) 大量に消毒処理ができる温湯処理機（商品名：湯芽工房）が（株）タイガーカワシマ社によって開発されている。
 - (2) もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病などの細菌病は完全に殺菌できるわけではないので、出芽時～育苗期の高湿・多湿により発病するおそれがある。このため、発芽・育苗適温を守るなど、適正な育苗管理を行う。
 - (3) 防除効果を安定させ、かつ発芽率の低下を防ぐため、水温・時間は60℃・10分間を遵守する。
 - (4) 60℃・10分間浸漬した場合の発芽率の低下は、コシヒカリで0～1%である。
 - (5) 2年以上保存した種子では発芽率が大きく低下することがあるので、前年産の種子を使用することが望ましい。
 - (6) もち品種、特に陸稲では、温湯消毒により発芽率が大きく低下する品種があるので、うるち品種に限る。
 - (7) 15℃の水を60℃まで上昇させるのに約4時間かかるが、あらかじめ60℃に近い温水を入れることにより作業時間は短縮される。
 - (8) ばか苗病、褐条病には防除効果が劣る。